
【報告】

『カオスに抗する闘い』『眼がスクリーンになるとき』合評会』のレポート

佐原浩一郎

2019年2月9日、クロスパル高槻にて、『カオスに抗する闘い』『眼がスクリーンになるとき』合評会』が開催された。イベント名に挙げられている二つの本、小倉拓也著『カオスに抗する闘い——ドゥルーズ・精神分析・現象学』(以下『カオス』と略す)と福尾匠著『眼がスクリーンになるとき——ゼロから読むドゥルーズ『シネマ』』(以下『眼がスク』と略す)は、共に若手の研究者によって著され、いずれも2018年7月末に刊行されたものである。本イベントは、はじめに『カオス』の書評会、次に『眼がスク』の書評会、最後にそれぞれの著者と特定質問者の四名による全体討議の順で行われた。特定質問者として、『カオス』に対しては千葉雅也氏に、『眼がスク』に対しては堀千晶氏にご登壇いただいた。そして、大阪大学人間科学研究科共生学系共生の人間学分野檜垣立哉研究室には、本イベントの主催を務めていただいた。以下はセクションごとの大まかなレポートである。

1. 『カオスに抗する闘い』書評会

1-1. 小倉拓也氏による自著紹介

『カオス』は、ドゥルーズ哲学を、晩年の『哲学とは何か』において前景化される「カオスに抗する闘い」の観点から読み解く研究である。議論の前提として、ドゥルーズにおけるカオス概念が、『差異と反復』などで用いられるものと『哲学とは何か』などで用いられるものとのあいだで区別されるということが指摘される。前者がそこから多様な現実を産出する潜在的なシステムとしてのカオスモスであるのに対して、後者はカオスモスがそこから構成され、そこへとほどけていくものとしての非システムである。こうした非システムとしてのカオスは、『差異と反復』では諸要素のセリー化以前の「不連続的瞬間」に相当し、『意味の論理学』では「深層」の第一のアスペクトである「寸断された身体」に相当するのだが、小倉氏は、『哲学とは何か』を含めた三つのいずれの著作に関しても、ここからカオスモスが構成されるプロセスの根本的な契機、つまり最初に(『哲学とは何か』で言われる)カオスから出来する際の、そして最後にカオスへと落下していく際の、カオスとの最も接近した闘いが、『カオス』の中心的な関心

であると強調している。前者においては器官なき身体の構成を、後者においてはモニュメントの行為を手段として、カオスに抗する闘いは遂行されることになる。小倉氏は、メラニー・クラインの分析および初期ドゥルーズにおける他者論、無人島論などとの対比を通じて器官なき身体の構成を捉えており、アンリ・マルディネおよび後期ドゥルーズの芸術論の分析を通じて器官なき身体概念がモニュメントという概念へと展開されていく道筋を示している。

哲学における思考が、カオスにおいて諸要素が無限速度で現れると同時に消えると言われるときの「カオスの無限速度」に匹敵するということに対して、「モニュメント」あるいは「感覚の存在」としての芸術作品は、無限速度に匹敵するのではなく、カオスの合成によって一時的に感覚可能になったものとして規定される。『差異と反復』において、不連続的瞬間を融合していた原初的な感受性は〈記憶〉によって保存されていた。しかし、〈記憶〉が機能しなくなったとしても、感覚の存在としての芸術作品こそが、そうした原初的な感受性を停留させるのだと小倉氏は述べている。

1-2. 千葉雅也氏によるコメント

千葉氏のコメントは、『カオス』が、自身の『動きすぎたはいけない』(以下『動きす』と略す)と基本的着想のレベルで似ているということ、つまり「カオスに抗する闘い」を「崩壊ぎりぎりのところで個性を維持すること」だと言い換えるならば、それがドゥルーズ哲学の旨味だとはっきりと打ち出したのは『動きす』が最初だという指摘からはじめられた。千葉氏による批判点は、大きくは二つに分けられ、それぞれの批判点について個別の質問が小倉氏に対して投げかけられた。

一つめの批判点は、『カオス』と『動きす』のこうした類似にもかかわらず、『カオス』において両者の差分が明示されておらず、『動きす』が参照されて然るべきであると思われる箇所でも参照されていないということである。参照の欠如あるいは不足が確認される箇所に関しては、『カオス』第三章の動的発生の中途における個体化が問われる場面、第七章の形態をめぐる議論、そして第

二章の、時間の第一の総合に主体がばらばらになってしまうような破壊的なモーメントを見る場面などが挙げられた。この批判点に関して、小倉氏に対して以下の質問が投げられる。先行研究に対して新規的な議論を提示するという点についてどう考えているのか、そして『動きす』に対する『カオス』の新規性はどこにあるのか（質問①）。

二つめの批判点は、接続性の扱いにかかわる。『カオス』というのは総じて接続性の肯定であり、接続過剰に抗しつつ接続性を必要とするというアンビバレンスを明示した『動きす』の解釈よりも、ドゥルーズ像としての解像度が荒くなっているのではないかと千葉氏は話している。つまり、『カオス』においては否定神学的なものが抱える去勢あるいは禁止を排除するような論理構成がとられているのではないかと、ということである。この批判点に関する質問は、小倉氏は、接続過剰の問題、否定神学の問題、去勢の問題をどう考えているのか、ということであった（質問②）。

いくつかの点で、千葉氏は『カオス』を評価している。最初期テキストを用いた単為発生のテーマ化、メラニー・クラインに関する詳述、マルコフ連鎖への注目、そして破滅的潜在性に対して「可能的なもの」という通常ドゥルーズにおいてはマイナスな概念として扱われるものを救い出したこと、などである。しかし、

千葉氏は、『カオス』における『動きす』の扱いについて、以下のように再度批判している。『カオス』では、自身の実験的なナラティブがコモディティ化され、自身がテキスト読解において経験してきた歴史的桎梏が均されてしまっている、言わば「平成化」されていると感じる、と。

1-3. コメントへの返答

二つの質問に対する小倉氏の返答は以下のようなものである。

①先行研究によって切り開かれた地平の上で自由にものを考えて書くことができるようになってきていると理解している。差分については、『動きす』が、ほどけては接続するようなイロニーとユーモアの往還として読めるものであるとするならば、『カオス』では、ほどけてもう再接続がありえないような生の境域が考えられている。

②確かに結びつきがゼロ度にほどけるとということだけを問題にしているのだが、接続について言えば、それを担保するというモチベーションでそうしている。接続の問題に関しては、自身がそれをほじくり返して、千葉氏が明らかにしたこと以上に何か新しいことが言えるとは思わなかったし、今も思っていない。



『カオスに抗する闘い』書評会の様子

2. 『眼がスクリーンになるとき』書評会

2-1. 福尾匠氏による自著紹介

はじめに『眼がスク』の二つの方法論的前提が提出される。一つは、『シネマ』以外のもの（ドゥルーズの多くの著作、具体的な映画作品）の『シネマ』への適用の忌避、そしてもう一つは、歴史的な説明の忌避、つまり運動イメージと時間イメージを戦前と戦後へと、あるいはベルクソンの言及の減少をベルクソンの乗り越えへとたんに還元してしまうことの忌避である。

次に、『眼がスク』の中核をなす「リテラリティ」という概念が紹介される。「リテラリティ」とは、「文字通りの」あるいは「見たままの」といった形容詞が名詞化したものであり、比喩的なもの、フィギュル的なものに対立している。『眼がスク』では、映画を人間の精神や現象学的なものから考えるのではなく、リテラルに見られる対象として捉えるということが前提されている。福尾氏は、情動、行動へと繰り延べられる知覚の境位を「物の知覚」と呼び、これが、運動イメージと時間イメージが未分化であり両者を歴史的な序列によって説明させないような内在平面を構成しているのだと言う。

続いて、リテラリティとフィギュル的なもの対立に関する三つのアスペクトが紹介され、最後に『眼がスク』の二つの意義が述べられる。一つは、映画を見たりベルクソンのテキストを読んだりするという「受動的な経験と概念創造との不可分な関係を、リテラリティという概念によって名指す」ことであり、もう一つは、見ることと書くことの予めの一致（映画を見るときに何らかの理解の図式を当てはめてしまっている）、あるいは読むことと考えることの予めの一致（読みながらある種の解釈が働いてしまっている）、つまり諸能力の一致、共通感覚といったものに対する批判を、哲学の実践のレベルで考えることである。福尾氏は、具体的なものがわたしたちを受動的な状態に置くということを強調し、以下のように問題を設定する。なぜそうしたものが哲学には必要となるのか。そして、そこから新たな概念が創造されるならばいかなる方法論によるのか。

2-2. 堀千晶氏によるコメント

はじめに、非常に参考になった点として、次の三つの論点が挙げられる。1. 『物質と記憶』と『創造的進化』のドゥルーズによる短絡を指摘したこと。2. イメージと記憶との関係についての整理。3. 円錐をリテラルに読み、そこに様々なイメージを重ねていること。3について、堀氏は、ドゥルーズがひとつの議論をあたかも無理なく推移させているように見せながら実際には無理やりずらしていくというときのレトリカルなやり方を具体

的に示しているとして積極的に評価している。

ここからいくつかの批判が為されるのだが、その大部分は『眼がスク』におけるもろもろの除去に関することであり、大きくは四つに分けられる。

具体的な映画作品の除去について。福尾氏が「映画という経験のシステム」と呼んでいるものについて、堀氏は、具体的な映画作品が必要なくなってしまうようなそうしたシステムとは一体何なのかと問い、こうしたことが批評の危機と関係しているのではないかと語る。さらに、映画論を書くということについてどう考えているのかとも問うている。

ドゥルーズの他の著作の除去について。ここで堀氏は、ドゥルーズの他の著作を除去したうえで挙げられている事例（マクドナルドのチーズバーガーやサッカーのオフサイドなど）の良し悪しについて触れている。

ドゥルーズの映画論の講義の除去について。これについて堀氏は、研究者として単純に疑問であると述べる。堀氏は、1980年代の講義において「哲学とは何か」ということが一貫して語られているということに触れ、そこでの芸術と哲学の交差についてどう考えているのかと福尾氏に問う。

政治性や歴史性の除去について。『シネマ』において、それ自体のうちにリテラルに物を現出させる純粋な光学的・音声的イメージの例として、ロッセリーニの『ヨーロッパ一九五一年』のなかで工場の労働者について「まるで囚人たちを見ているようだった」と語られる場面が挙げられるのだが、福尾氏が言うゼロ度の知覚へと向かっていった場合、工場の労働者が囚人のように見えるわけがなく、もしそう見るとすればそこには政治性も解釈コードもある、と堀氏は話す。

ゼロ度の知覚について、堀氏は福尾氏との解釈の違いについても言及している。それによると、ゼロ度のものとして知覚イメージを設定し、そこから運動イメージと時間イメージが分化するという福尾氏の解釈に対して、自身は、ゼロ度の知覚としての知覚イメージは運動イメージであり、そこから時間イメージが派生することはないと考えている、ということである。

2-3. コメントへの返答

堀氏のコメントに対して、福尾氏は、この時代の状況のなかに、「見る」というそこから何かが始まるような契機が埋め込まれていないように思われると話したうえで、『眼がスク』は映画論でも批評でもなく、批評に向かうための条件を問い直すものであると述べている。さらに、福尾氏は次のように続ける。『シネマ』において、映画とは異なるものについてベルクソンが論じた言葉が映画というフィールドに組み入れられた結果、ベルクソンに関し

でも映画に関してもその捉え方が変化した。そうした組み換え可能性が現在の批評の世界にはまったくない。そして、こうした批評の危機とパラレルな状況それ自体が既に政治的なのだと福尾氏は語っている。

ドゥルーズが置かれていた歴史的な状況の排除については、シネマを閉じ込め、シネマに閉じこもるということを実践するためだと説明された。



『眼がスクリーンになるとき』書評会の様子

3. 全体討議

ここでは、全体討議において取り上げられたいくつかの論点を紹介したい。

堀氏による『カオスに抗する闘い』のコメント

堀氏は、『カオス』に関して一点気になったこととして、社会的・歴史的な次元がほとんど出てこないということを挙げる。そして、『カオス』の終盤で「人民」の喪失について議論しながら、一個人としての私性を強く持った老人の痴呆の話をするという場面に見られるギャップが非常に目を引くとも述べている。堀氏は、『カオス』を読み終えて、「生まれたことも生きることも死んでいくことも大したことではない」と語られる深沢七郎の「人間滅亡の唄」を思い浮かべたということを示している。

千葉氏による『眼がスクリーンになるとき』のコメント

千葉氏は、『眼がスク』について、自身が文学作品を書く際にこの本が非常に役に立ったという体験に触れつつ、ある種の知覚体験からのナラティブの成立を様々なジャンルでジェネレートしてくれる機械のようなものとしてこの本があると語る。千葉氏はさらに、福尾氏にとってすべての基準はアプリケーションではなくクリエイションなのだろうと感想を述べている。

小倉氏の問い：不可避の死について

小倉氏は、ドゥルーズを読むときはつねに人生について考えていたと打ち明けつつ、登壇者らに対して、絶対に不可避に死ぬということについてどう考えているのかと問う。これに答えて、千葉氏は、いつか死ぬということよりもその途中で殺されたり、死に近いような脅かしを受けるということにどう抵抗するかということのほうがリアルな死の問題だと述べる。さらに、死への恐怖を吐露する小倉氏と、気づいたら生きているのであり、途中で

ら入って途中から出ていくのだと述べる福尾氏について、両氏はいずれも生と死あるいは実存を偶然的なものだと考えているように感じられると話している。

『カオス』における具体的なものの不在について

福尾氏は、『カオス』における他者概念および芸術作品が何らかのまとまりの保持として語られているに過ぎず、「この絵」や「この小説」といった具体性のレベルがそこから抜け落ちてしまっているのではないかと指摘する。このことに関して千葉氏は、

生きているということの具体相、つまりわたしたちが生きていくなかで関わるもろもろの具体的なものが抜け落ちている話というのは、ただ「生きて死ぬ」という五文字に集約されたとても貧しいものになってしまうのではないかと述べている。小倉氏は、『カオス』における具体的なものについて、広く社会に共有されるものではないかもしれないと断りつつ、自分の老いの問題や死の問題が自身にとってはそのような具体的なものにあたると考えていると話す。



全体討議の様子

話題は多岐にわたった。上記はあくまでもいくつかの主要な論点に絞って抜粋された内容である。改めて振り返ってみると、本イベントは、特に千葉氏の登壇以降、氏が『カオス』について述べた「歴史性の排除と平成化」というテーマによって全体を貫かれながら進行していたように思われる。このテーマは、本イベントのなかで為されたような二つの本に対する批判としても、あるいは二つの本を本質的に理解するための補助線としても重要な役割を果たすのではないだろうか。こうしたことに、今回の合評

会が多少なりとも貢献できたのであれば幸いである。若い世代のドゥルーズ研究の一つの方向性が予感されたということも書き留めておきたい。

今回のイベントは大阪府での開催にもかかわらず、関西圏以外から足を運んでくださった参加者も散見され、登壇者に対する関心の高さがうかがわれた。「『カオスに抗する闘い』『眼がスクリーンになるとき』合評会」の実現にご協力いただいた皆様に対して、ここで改めて感謝の意を表したい。